一年生　休校中課題（古典）

① 完全マスター古典文法を参考にして次の活用表を完成させよ。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
聞く	聞	か	き	く	く	け	け	カ行四段活用
読む								
帰る								
勝つ								
並ぶ								
歌ふ								
助く								
上ぐ								
捨つ								
覚ゆ								
植う								
得								
過ぐ								
落つ								
恥づ								
報ゆ								
着る								
見る								
射る								
居る								
蹴る								
来								
す								
おはす								

基本形	死ぬ	あり	はべり	なし	甘し	よし	をかし	よろし	いみじ	豊かなり	静かなり	のどかなり	堂々たり	荒涼たり
語幹														
未然形														
連用形														
終止形														
連体形														
已然形														
命令形														
活用の種類														

② 文法的説明「児のそら寝」

次は教科書「児のそら寝」の本文です。用言（動詞・形容詞・形容動詞）に傍線を引きました。それぞれを例にならって、文法的に説明しなさい。

文法的な説明とは、**活用の種類**（○行○○活用）、**基本形**（辞書に載っている言い切りの形。動詞の場合はウ段の音で終わる）、**活用形**（未然形、連用形、終止形、連体形、已然形、命令形のどれか）の３つを答えることです。

（例）ラ行変格活用
「あり」連用形

今は昔、比叡の山に児ありけり。僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせむ。」と言ひけるを、この児、心寄せに聞きけり。さりとて、しいださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちけるに、すでにしいだしたるさまにて、ひしめき合ひたり。

この児、定めて驚かさむずらむと待ちゐたるに、僧の、「もの申しさぶらはむ。驚かせたまへ。」と言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへむも、待ちけるか

（例）サ行変格活用
「す」未然形

（例）ハ行四段活用
「言ふ」連用形

（例）ク活用
「わろし」連用形

ともぞ思ふとて、今一声呼ばれていらへむと、念じて寝たるほどに、「や、な起こしたてまつりそ。をさなき人は寝入りたまひにけり。」と言ふ声のしければ、あなわびしと思ひて、いま一度起こせかしと思ひ寝に聞けば、ひしひしとただ食ひに食ふ音のしければ、すべなくて、無期の後に、「えい。」といらへたりければ、僧たち笑ふことかぎりなし。

③ 文法的説明「絵仏師良秀」

次は教科書「絵仏師良秀」の本文です。用言（動詞・形容詞・形容動詞）に傍線を引きました。
それぞれを文法的に説明しなさい。

これも今は昔、絵仏師良秀といふありけり。家の隣より火出で来て、風おしおほひて、せめければ、逃げ出でて、大路へ出でにけり。人の書かする仏もおはしけり。また、衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、ただ逃げ出でたるをことにして、向かひのつらに立てり。

見れば、すでに我が家に移りて、煙、炎くゆりけるまで、おほかた、向かひのつらに立ちて眺めければ、「あさましきこと。」とて、人ども、来とぶらひけれど、騒がず。「いかに。」と、人、言ひければ、向かひに立ちて、家の焼くるを見て、うち

うなづきて、時々笑ひけり。「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろく書きけるものかな。」と言ふときに、とぶらひに来たる者ども、「こはいかに、かくては立ち給へるぞ。あさましきことかな。物のつきたまへるか。」と言ひければ、「なんでふ物のつくべきぞ。年ごろ不動尊の火炎を悪しく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれと、心得つるなり。これこそ、せうとくよ。この道を立てて世にあらむには、仏だによく書きたてまつらば、百千の家も出で来なむ。わ党たちこそ、させる能もおはせねば、物をも惜しみたまへ。」と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。

その後にや、良秀がよぢり不動とて、今に、人々、めで合へり。

④ 文法的説明「なよ竹のかぐや姫」

次は教科書「なよ竹のかぐや姫」の本文です。
自分で、用言（動詞・形容詞・形容動詞）を探して傍線を引きなさい。
傍線を引いた用言を、それぞれ文法的に説明しなさい。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。怪しがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁言ふやう、「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嫗に預けてやしなはす。うつくしきこと、限りなし。

いと幼ければ、籠に入れてやしなふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節を隔てて、よごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、翁やうやう豊かになりゆく。この児、やしなふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどとかくして髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりもいださず、いつきやしなふ。この児のかたちのきよらなること世になく、屋のうちは暗き所なく光満ちたり。翁、心地悪しく苦しきときも、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。